【ねがいましては】

平成２３年１２月２１日　　*KYOWA SCHOOL*
第２５４号

「呼吸するように」

買っておいたのはいいけれど、なかなか目を通せなかった本のはしがきに目が止まりました。「本を読むのは空気を呼吸するように、いつでも読んでいるがいつの間にか一冊を読んでしまったという読み方もあるのではないか。」（だから人は本を読む『福原義春』東洋経済新聞社）

この文の『本』という部分を『勉強』に置き換えてみたらと感じたのです。

勉強するのは空気を呼吸するように、いつでも勉強しているがいつの間にか勉強してしまったという勉強の仕方もあるのではないか。

この状態、勉強にとってはこの上ない最適なものに感じたのです。

「さあやるぞ」という意気込みもなし、勉強に対して構えを持っていれば、それは内心好きではないことなのかもしれません。今の子どもたちにとってついつい後回しになってしまう勉強は、「さあやるか」というちょっとした思い切りが必要かもしれません。

もし空気を吸い込むように勉強ができたら・・・・。何のストレスも感じることなく、自然な気持ちのまま勉強に向かうことができたら・・・・。

この教室独自の「ランチ講習」は、まさにその気持を受け取ることのできる時間なのかなと感じます。かといって、構えがゼロになるわけではありません。なぜなら向かっている内容が学校に結びついているもの中心になるからです。結局、今日一日取り組んでいても、明日のテストに結果が現れるかどうかという不安がつきまといます。

「どうしよう、どうしよう・・・・。」子どもたちのこころは不安なままになります。

空気のように勉強を吸収したい。子どもたちにとっては理想の頂点でしょう。でも、限りなくそこへ近づけるためには、どうしたらいいでしょう。具体的に探してみました。

背中を押されるような勉強からの脱出・・・つまり「やりなさい」という命令にも受け取れる受身の勉強がない状態。

結果を気にしない・・・その時を精一杯に取り組んだのだから、まず、自分自身が満足感を得られることが優先。

それによって、子は向かう楽しさを感じるようになる可能性があります。しかも喉に刺さったホネのような気持ちがまったく別のものに感じられるようになるかもしれません。明日のテスト、どうしようなどという不安がない状態。

自然体で質問する状態・・・「ねえ、この〇〇のところまではわかったんだけどね、このあとなの、わからなくなるのは・・・。」わからないのは良くないこと、と、つい思いがちになってしまう子のこころはまったく影を潜めます。

親と子の関係が空気のようになること・・・そんな我が子の屈託のない日々の取り組みを、目を細くして見守るおかあさん。きっとお子さんはこころからご両親への感謝と尊敬を感じているはずです。と同時に、恩が彼らを前向きにしていきます。

他人は他人・・・学校現場では順位や通信簿など、数字で子どもたちを評価するシステムになっています。かなり歴史的な制度であるため、今の親御さんたちにとっても違和感のない制度です。しかし、子どもたちは常に他人を意識しながら勉強をしています。特に順位はシビアです。上がった、下がったと、如実に感覚的なものが現れます。

１位は確かに聞こえがいいですが、前向きなこころをやわらげてしまう危険性があります。「なんだ、この程度で１位が取れるんだ・・・。」勉強の持っているどんどん歩いてみたいという前向きな気持が削がれる結果になりかねません。

他人は他人、自分の持っている可能性を楽しむべきです。テストはあくまでも副産物として受け入れられたらいいと思います。が、無理ですね・・・。

テスト結果が内申点に結びつき、高校進学へ影響するからです。

この小さな空間では、勉強の持っている楽しさを感じていただけるように、数学などは６年生の段階で学ぶようにつとめています。自分の楽しもうとする力だけがたよりです。それには土台が必要です。整数の計算、分数計算、小数計算、そのどれもが確実性を持っていなければなりません。丁寧を一番に、基礎固めをします。人よりもかなり多い計算内容・・・でも彼らにとってこれが勲章のようなもの、合うための必殺技なのかもしれません。書いていて気持ちがいいのでしょう。そのまま、常に学校の進度を上回るスピードで歩くことができればＯＫです。数学の楽しさを感じながら常に机に向かい続けることができればＧｏｏｄ！

空気のように勉強を感じることができたなら、子どもたちが一番手にしたいものでしょう。

いつであったか、「君たち、もし学校からテストがなくなったら勉強するかい。」

「しなーい。」彼らの中に宿る勉強の姿は、テストのためのものになっているようです。テストがあるから勉強しているのです。勉強はテストのためにあるのです。誰もそうとは言っていないにせよ、彼らの反応はまさにそうなっています。

わかる楽しさ、学ぶ楽しさ、その土台となる「こころのあり方」を、まず、しっかりと作ってあげることが学びを教える者の最大の勤めだと感じています。

子どもたちの見せる生き生きとした表情、真剣に向かうまなざし、いつもありがとう。